

## 三田市近辺のニホンミツバチ4群報告 (2002年)

大谷 剛\*

2002年に三田市およびその隣接地の神戸市北区道場町で観察したり撤去したりしたニホンミツバチ4群について報告する。これまで、1999年に3群を処理し(大谷 2001)、2000年は1群、2001年は3群のニホンミツバチに遭遇している(大谷 2002)。

### 1. 神戸市北区道場町, 木元一虎氏宅, 分蜂群 出戻り (2002.4.14)

兵庫県立人と自然の博物館から約5 kmの筆者自宅より150 mほど離れた平屋家屋に住む木元一虎氏から、分蜂群が飛来したという知らせを受け(9時半ごろ)、早速出かけて調べてみると、庭の松の木、約1 mの高さの枝に集結していた(Photo 1)。收容のための空き巣箱や燻煙器、面布などの用具を博物館に取りに行き、巣箱に振り落とす作業を開始したのは、11時である。空巣板が入った巣箱の上に一旦落とされた蜂群は、すぐに全個体が飛び立ってしまい、そこから約10 m離れた木元一虎氏の玄関付近に集まり始めた。玄関の庇の左端には、1 cmほどの隙間が開いており、煙をかけると、約5,000匹のハチはどンドン入り込んでしまった(Photo 2)。おそらく発見されたのは女王バチと一緒に出てこなかった分蜂群であり、振り落とした刺激で全群が飛び立ち、母巢近くに集結後、煙の刺激で母巢に戻ってしまったと考えられる。

### 2. 神戸市北区道場町, 木元高明氏宅, 屋根裏群 (2002.4.27)

木元高明氏の家は、木元一虎氏宅から約100m、筆者自宅から約50 m離れた場所にあり、天井裏にあるミツバチの巣から蜜がこぼれてきて困るので、見てほしいという申し出を以前より受けていた。前項の蜂群は回収できなかったものの、回収準備は一応調っているため、屋根裏の蜂群を見せて頂くことにした。

木造平屋だが、屋根裏の高さは3mほどもあり、ニホンミツバチの群はその一番高いところに造巢していた(Photo 3)。巣板は10枚以上あるようでかなり大きい群である。前年の夏、高温と貯蜜の重さで、巣板の一部が壊れて天井面に落下し、蜂蜜が廊下にたれ落ちたという。足場をかなりしっかり組まないと、なかなか回収できない状況である。写真だけ撮らせて頂いて引き揚げた。

蜂群は現在もそのまま生活している。屋根裏の空間には他にキイロスズメバチの廃巢が2つ残っていた。

### 3. 三田市けやき台, 野崎裕久氏宅, 逃去群回収 (2002.10.6)

土曜日午後5時過ぎ、筆者は休日で自宅に居たため、野崎さんから自宅のほうに電話があった。ニホンミツバチの逃去群らしい。暗くなり始めていたし、雨もパラつき出していたので、断ろうとしたが、一晩雨中で過ごすのもかわいそうだと思います、クルマで迎えに来て頂いた。

ミツバチは庭の石灯籠(高さ約30 cm)の中に集結していた(Photo 4)。前日に飛んできて、ここで一泊したという。石灯籠が低いので、そして雨がかなり降っていた(18~19時の降雨量、6 mm/h)ので、巣箱への收容は思ったより難渋した。

この蜂群は、オオスズメバチの襲来が激しい博物館を避けて、自宅に持ち帰り、庭に設置した。10月からの造巢だったが、6枚群となり、越冬に成功した。

### 4. 三田市富士が丘, 小笠原毅氏宅, 二階軒下群撤去 (2002.12.18)

兵庫県立人と自然の博物館とNPO法人・人と自然の会で共催した「ひとはくフェスティバル」のとき(11月3日)、ミツバチ研究会は「森のみつばちたちのおくりもの」という蜂蜜しぼりのイベントを主催した。これを見学に来られた小笠原毅氏が、自宅の二階の庇に造巢しているミツバチをできれば撤去してほしいと申し出られた。

11月6日に一人で下見に伺う。富士が丘の小笠原氏宅は博物館から徒歩約5分である。5月ごろ飛来してだんだん大きくなったというニホンミツバチは二階の庇にしっかりと造巢していた(Photo 5)。8枚群でかなり大きいが、足場が悪く、一人での撤去は無理であることがわかった。その後、11月14日と11月20日にも協力していただけそうな人と伺って、撤去の方法を検討した。

結局、人と自然の会・みつばち研究会の木村公之氏のアイデアで、木製の足場をつくり、その上に脚立をのせ、近くまで登って撤去しようということになった。

決行は12月18日。みつばち研究会からもう一人、鳥越俊彦氏にも来て頂き、3人で作業を開始した。まず、木村氏が脚立の足場(Photo 6)を作製、この足場に脚立を載せ、木村氏が最前線に立つ(Photo 7)。中継点に

\* 三田市弥生が丘6丁目 兵庫県立人と自然の博物館内 姫路工業大学 自然・環境科学研究所 生態研究部門

鳥越氏、私は二階の部屋にいて、降ろされてきた巣板を空巣箱に収納した。

脚立を登って、巣板を柳葉包丁で切り取り、下に降ろすという作業は一人ではかなりの負担になる。その上、木村氏は四方金網面布（頭部を防御する金網性ネット）を使用したので、作業時の肩の動きで帽子から上にずれて隙間ができ、そこから10数匹の働きバチが面布内に入ってしまった。さらに悪いことに木村氏は朝の髭剃りのときシェービング・ローションを塗ってきていた。働きバチにとって異様な匂いのする顎が集中的に攻撃された。蜂蜜のたっぷり入った巣板は片手で支えるには重すぎる。不安定な姿勢で作業を続ける木村氏は、ハチ付巣板を2回下に落としてしまった。

足場づくりを入れると、約3時間半の作業で、働きバチをかなり残した状態（Photo 8）だったが、空巣箱に収容した蜂群と撤去した巣板を博物館に持ち帰った。そして、数日後、ニホンミツバチ用の巣箱に移し換えたが、5℃以下の気温が続く季節のため（12/18から1/10までの平均気温の平均2.35℃）、造巣能力に優れたニホンミツバチでも新たに造巣することはできなかった。そして、正月時期の手入れ不足に加え、蜜枠の配置が悪いのが禍いして、この群のハチはすべて凍死してしまった。

## 5. 自然群撤去に関するメモ

セイヨウミツバチ (*Apis mellifera*) はオオスズメバチ (*Vespa mandarinia japonica*) の攻撃の前に全滅する (Matsuura & Sakagami 1973)。そのため、セイヨウミツバチでは自然営巣群が成り立たないのだが、独自の防御法をもつニホンミツバチ (*Apis cerana japonica*) では自然巣の報告がしばしばあり (岡田1997; 佐々木1999; 吉田2000など参照)、私も過去に2件の自然巣 (うち1回は撤去) を観察し (大谷 2001)、そして今回の撤去を経験した。

ニホンミツバチの自然群捕獲に関しては、藤原・村上 (2000) が詳述している。その中で「晩秋は巣ひ枠への移し替えが容易」という項目がある。確かに12月18日の11~12時気温は7.1℃で、ハチたちは驚くほどおとなしく、ほとんど飛び回ることにはなかった。二階の部屋内に用意した空巣箱に納めるときも部屋内を飛び回らなかったため、作業は容易だった。それから、藤原・村上 (2000) が図で紹介している「ホースと小型掃除機を使った蜂群捕獲器」は、蜂がかなり傷むという噂を聞いていたので採用しなかったのだが、今回のように足場の悪いところでは積極的に利用すべきだったかもしれない。今後、木元高明氏宅の屋根裏群で試みることも可能である。

今回の撤去作業では木村氏と鳥越氏に無理やり日程を調整して頂いたため、日数には余裕がなかったのである

が、藤原・村上 (2000) には、作業を二日にわけてすると回収がうまくいくという記述がある。今まで配慮しなかった点だが、今後、二日がかりの作業は頭に入れておく必要があると思われる。かろうじて飛び立ったハチも次の日には確実に集結しているはずである。後日、「掃除機捕獲器」を携えていけば、残りのハチ (Photo 8) の回収は一人でも可能だったのではないだろうか。

## 6. 謝 辞

観察や撤去の際、いろいろ便宜をはかって下さり、協力を惜しまなかった次の方々、およびその家族の方々に厚くお礼申し上げる：木元一虎氏、木元高明氏、野崎裕久氏、小笠原毅氏。また、小笠原氏宅の蜂群撤去の際、多大な労力を割いて下さったNPO法人・人と自然の会の木村公之氏および鳥越俊彦氏に深謝の意を表す。

## 7. 引用文献

- 藤原誠太・村上 正. 2000. 日本ミツバチ—在来種養蜂の実際— (日本在来種みつばちの会編). 農山漁村文化協会, 175 pp.
- 大谷 剛. 2001. ニホンミツバチの2自然巣と3逃去群 (1999年, 宝塚市・三田市). 兵庫生物, 12(2): 83-86.
- 大谷 剛. 2002. 三田市のニホンミツバチ4逃去群 (2000-2001年). 兵庫生物, 12(3): 126-129.
- 岡田 一次. 1997. ニホンミツバチ誌. 玉川大学出版部, 86 pp.
- Matsuura, M. & Sakagami, S. F. 1973. A bionomic sketch of the giant hornet, *Vespa mandarinia*, a serious pest for Japanese apiculture. J. Fac. Sci. Hokkaido Univ. Ser. 4 (Zoll.), 19: 125-162.
- 佐々木正己. 1999. ニホンミツバチ—北限の *Apis cerana*. 海游舎, 192 pp.
- 吉田 忠晴. 2000. ニホンミツバチの飼育法と生態. 玉川大学出版部, 135 pp.

## 8. Summary

Takeshi OHTANI (2003). An annual report (2002) on 4 colonies of Japanese honeybees in Sanda City and its vicinities. Hyogo Biology 12(5): 1-8. Institute of Natural and Environmental Sciences, Himeji Institute of Technology, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo, Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan.

Four colonies of Japanese honeybees, *Apis cerana japonica*, were observed in 2002. (1) A swarm of about 5,000 bees had been observed clustering on a branch of a pine tree belonging to Mr. Kazutora

Kimoto in Dojo-cho, Kita-ku, Kobe City (Photo 1). When I tried to shake it off into a hive with empty combs, the whole colony flew away. They entered back to the mother colony (Photo 2). (2) A big colony (over 12,000 bees) was observed on the loft of the one-storied house belonging to Mr. Taka-aki Kimoto in Dojo-cho, Kita-ku (Photo 3). (3) An absconding cluster of about 4,000 bees was observed in the garden lantern of Mr. H. Nozaki in Sanda (Photo 4). This cluster was moved to the author's garden. (4) A large natural colony of about 10,000 bees (Photo 5) lived under the eaves of a 2-storied house (Mr. T. Ogasawara) in Sanda City. The removal was carried out using a handmade scaffold (Photo 6 & 7). After our works of the removal, about 2,000 bees gathered at the remainder of the nest (Photo 8). The suitable way of the removal of natural colonies is discussed in the last section.

Photo 1. 木元一虎氏宅（神戸市北区道場町日下部903）庭にある松の木の枝に集結した分蜂群（2002.4.14, 10:56 撮影）。高さは約1 m。蜂数は5,000匹程度。すぐ下に空き巣箱を置いて振り落とした。

Photo 2. 振り落とされた働きバチたちは直ちに飛び上がり、一虎氏宅の玄関近くを飛び回り、すぐに庇の左側に集結した。燻煙器（赤矢印）で煙りをかけたところ、隙間から屋根裏に入ってしまった（2002.4.14, 11:21 撮影）。

Photo 3. 木元一虎氏宅から100 m ほど離れた木元高明氏宅（神戸市北区道場町日下部872-2）の屋根裏に造巣しているニホンミツバチ（2002.4.27, 13:50 撮影）。柱の影で見えにくいですが、巣板は10枚以上ありそうである。ハチ数も12,000匹を越えていると思われる。

Photo 4. 野崎裕久氏宅（三田市けやき台4-26-2）の庭にある石灯笼に集結した逃去群（2002.10.6 撮影）。雨がかなり降っていた。4000匹ぐらいか。

Photo 5. 小笠原毅氏宅（三田市富士が丘1-6-8）の二階、屋根の庇に造巣したニホンミツバチ（2002.11.14 撮影）。右側の小さい巣板3枚にも蜜がびっしり入っていた。1万匹はいると思われる。

Photo 6. 現場で製作した木製の足場（2002.12.18 撮影）。灰色のスポンジを貼り付けた斜めの部分3点（白矢印）が1階の屋根面に接地すると、その上部の板（灰色）が平らになり、脚立を乗せることができる。

Photo 7. 1階の屋根に上って足場の上に脚立を乗せているところ（2002.12.18, 10:50 撮影）。

Photo 8. 巣板をすべて取り去ったあとに集結したニホンミツバチたち（2002.12.18, 13:59 撮影）。2,000匹ぐらいだろうか、このまま放置してしまった。

